展示解説シート

ずっと、道があった

令和4年度 秋季企画展

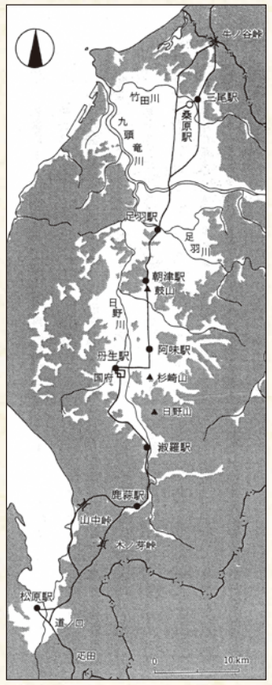
はじめに

市内には古代の官道である北陸道※が縦貫し、近世には金津と細呂木に宿場も設けられました。近世の北陸道沿いにあたる千束には今も当時の一里塚の一部が残っています。その他にも、現在の国道8号線が通る牛ノ谷峠を越える道、吉崎御坊の脇を通る道、剱岳地区の山中にある風谷峠を越える道や、

三国湊や丸岡城から延びる道によって各村々はつながっていました。

これらの道は身近にありますが、少しづつ変わっていくため、昔と同じ所を通っているかはわかりません。本展では各時代の資料や現在の写真を織り交ぜながら、あわらの道の歴史を紹介します。

※北陸道は「北国街道」「北国往還」などと呼ばれることもありますが、本展では北陸道と統一して呼称します。



【図1】古代北陸道の道筋
『福井市史』通史編1より転載

1 北陸道

7世紀末頃、朝廷は都と地方を結ぶことを重要課題とし、東海・東山・北陸・山陰・山陽・西海・南海の七道を整備しました。七道は駅使往来の重要度と頻度に応じて、大路・中路・小路に区分され、そして、道には三〇里（約16Km）を目安に駅家を設置し、区分により一定数の駅馬が置かれていました。北陸道は小路と規定されており、おおよそ5疋の駅馬を駅家に常備していました。

平安時代中期の法令集である『延喜式』に越前国の駅として、松原・鹿蒜・淑羅・丹生・朝津・阿味・足羽・三尾の八駅が記されています。これらの駅は同時に決定したのではなく、敦賀郡の松原・鹿蒜、丹生郡の丹生、足羽郡の足羽、坂井郡の三尾が当初の駅だったと推定されています。

道筋については諸説ありますが、7世紀末頃の北陸道は、九頭竜川以北から東部山麓へ行き、横山古墳群の近くを通り、牛ノ谷峠を越え江沼郡に入る道がとられていたと考えられます。これは、坂井平野は10世紀頃までラグーンが多くあり、そこに道を通すのは困難であったためです。その後、乾燥がすすみ、平野部も通れるような状況となり、中・近世の道筋に近くなっていったものと考えられます。

3 天爵大神

天爵大神とは、本当の神様の名前ではなく、明治時代の前半に愛知・福井の道路工事で活躍した実在人物の称号です。元尾張藩士で実名を水谷忠厚（1841～1892）といいます。天爵とは『孟子』に「仁義忠信という徳をもって善を楽しみ行い続けられること」で、当初水谷は天爵大臣と名乗っていました。しかし、愛知県令・国貞廉平が水谷の志に感じ崇めて、大神と呼び、それが後には時の皇族や政治家からも公認をされていきました。

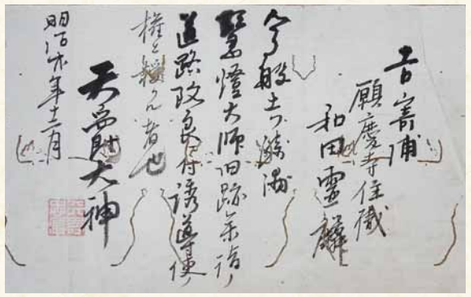
現在の道路工事は公共事業として行われていますが、水谷が活動していた明治10年代半～20年代半は地域住民により維持されていました。そのような時代に水谷は資金集めから工事までボランティアで行いました。水谷が福井県に滞在していたのは明治20年（1887）～ 22年（1889）のわずか2年ばかりですが、その間に18ヶ所もの道路改修を手がけ、そのうちあわら市に関係するのは5ヶ所あります。その中で、今も当時の面影が残るのが吉崎に向かう蓮如道にある鴫谷の切通で、最も大きな業績が芦原街道（現県道5号線）の新設です。

工事スタイルは独特で、地元有力者に工事の辞令を与え、寄付集めに各所を渡り歩き、その合間に工事を指揮し、工事現場には親王や政治家・宗教家の揮毫による幟などを掲げて現場を鼓舞しました。指揮するだけでなく、自らモッコを担いで工事を行い、通りかかった人間には、老若男女の区別なく声をかけ、土一掬いでも工事に参加させました。また、道路をより直線に付けるため、反対する地主に対して半ば強制的に説得して土地の利用を認めさせていました。

このような道路事業を個人で行ったのは後にも先にも天爵大神・水谷忠厚ただ一人で、まさに神と呼ばれるにふさわしい功績でした。

（文責:学芸員 九千房 英之）

【図4】天爵大神写真（左側）
浄泉寺所蔵（当館寄託）



【図5】願慶寺住職を「誘導使」に任命した文書
吉崎御坊　願慶寺蔵

あわら市郷土歴史資料館

令和4年度秋季企画展「ずっと、道があった」

【会　　期】 令和4年9月17日（土）～ 11月13日（日）
【開館時間】 9:30 ～ 18:00（最終入館は17:30）
【休 館 日】 毎週月曜日・第4木曜日（その日が祝日の場合はその翌日）
【お問合せ】 電話 0776-73-5158（郷土歴史資料館直通）
e-mail：maibun@city.awara.lg.jp

中世初期には同じような金津・細呂木を経由して加賀に行く道が見られます。『源平盛衰記』に、文治元年（1185）9月23日に、平清盛の義弟の平時忠（1130～1189）が能登国に配流になった際の記述に「（前略）越の初雪踏み分て、燧山、柚尾坂、越前国分、金津宿、蓮池（蓮ヶ浦）、細呂宜山を越え過ぎて、加賀国須川社を拝しつつ（後略）」とあり、このころには金津→蓮ヶ浦→細呂木を通る道があったことがわかります。

時代は下り、室町幕府の重臣・細川政元（1466～1507）と歌人・冷泉為広（1450～1526）が、延徳三年（1491）に越後国へ下向した時の道順には「（前略）セキ、右ニミゾノヲ森、理智院（総持寺）、ウハ野、左ニ蓮ノ浦、ホソロギ、モンドウ坂、右ニカシマ并ヨシザキ、玉サカノ浦、タチバナ（後略）」とあり、吉崎に寄り道をしてはいるものの、道としてはほぼ近世のルートとなっています。

近世の北陸道は五街道に次ぐ脇往還の一つで、道幅は三間（約5.5m）で、その両側に縁が三尺（約90cm）ずつ、こう江（水路）が三尺ずつ、土揚場が六尺（約180cm）ずつと規定されていました。ルートは、近江国米原から南部津軽まで続いていて、あわら市近郊は、長崎宿→金津宿→細呂木宿→橋宿と通り、関・千束・細呂木に一里塚がありました。松尾芭蕉をはじめ、多くの人々が交通した、陸の大動脈でした。

【図2】 細呂木関所図（中川雲屏筆『山水真写』より）
長浜城歴史博物館所蔵

2 諸 道

市 街 道

金津から牛ノ谷を経て加賀国に入る道です。牛ノ谷には口留番所が置かれていました。金津宿で開かれた市に、街道筋の村落から農産物がもたらされ、帰りには日用品を求めて持ち帰った道だったことからついた名称と言われています。道筋は、①牛ノ谷→金屋→熊坂→笹岡→矢地→菅野→山室→金津と、②牛ノ谷→沢→指中→蓮ヶ浦→（北陸道）→金津の二つがあります。①は正保2年 （1645）と貞享2年（1685）の国絵図にのみ見られ、②は貞享以降の国絵図に描かれています。理由は不明ですが①から②の道に置き換わったものと考えられます。

風谷峠越道

丸岡から権世市野々を経て峠を越え、加賀国に入る道です。権世市野々に口留番所が置かれていました。道筋は権世市野々→権世→椚→前谷→北→中川→瓜生→乗兼→長畝→丸岡となっています。戦国時代には加賀の一向一揆勢がこの道を通り、越前国へ攻込み、前谷の帝釈堂周辺で激しい戦闘があったと言われています。この峠越道は難所だったので、大正時代にもっとゆるやかな刈安山峠道が作られ、廃れていきました。

金津三国道

金津と三国を結ぶ道で、南金津から竹田川南岸を通る道と、北金津から竹田川北岸を通る道がありました。道筋は、南が南金津→東善寺→上番→中番→下番→玉木→河間→今市→竹松→三国で北が北金津→井江葭→国影→二面→舟津→加戸→三国となっています。貞享の絵図以外では南側しか描かれておらず、三国と金津を結ぶ道では南側が主要な道だったと思われます。

【図3】 越前国絵図（貞享2年）を一部改変
『松平文庫』福井県文書館保管
※詳細画像は福井県文書館のデジタルアーカイブで見られます

北陸新道

明治6年（1873）に丸岡と大聖寺の有志が請願して開鑿した道で、熊坂新道とも呼ばれていました。現在の国道8号線の基になっています。道筋は旧北陸道（近世）を北横地で分岐し、丸岡→長畝→中川→牛ノ谷→大聖寺となっています。明治9年（1876）に着工し、明治11年（1878）に竣工し、この年の10月には明治天皇の北陸巡幸路として使われました。牛ノ谷や中川には明治天皇巡幸を記念する碑が今も残っています。

芦原街道

明治16年（1883）の芦原温泉の発見は、周囲の状況を一変させました。湿地が広がっていたところに、1年間で100軒もの家が立ち、多くの人が訪れる温泉街となりましたが、道がなく訪れるのに不便なところでした。そこで、明治21年（1888）に芦原村の有志が相談して南北道の整備を行うことになり、当時県内で道の整備をしていた「天爵大神」こと水谷忠厚に実施を依頼し、芦原温泉→針原までの新道を明治25年（1892）に完成しました。後に北へ向かう芦原温泉→二面→小牧→吉崎への道も整備され、芦原温泉に入る南北の道として、大勢の湯治客に利用されました。